

八幡図書館賞：「温かい時間」 久保 優子

娘たちが幼い頃、よく図書館を利用した。家族4人分、貸出できる上限16冊の絵本を借りて、毎晩読み聞かせていた。家にある本も合わせて、寝るまで読む。娘と私の楽しい儀式だった。おかげで娘は本好きになった…と言いたいところだが、上の娘はさほど本が好きにならなかった。ただ母親と過ごす時間が楽しかっただけのようだ。下の娘は本好きで、特に絵本が好きである。幼い頃に図書館で借りて、好きだったけど買ってもらえなかった本を、大人になって買い集めている。私も下の娘も本屋や図書館に何時間いても飽きないが、上の娘は30分とられない。そんな娘も、わが子にはせっせと本を買い、図書館で借り、読み聞かせをしている。やっぱり親子だなあ。親のすることは真似するんだ、と思う。

私の両親も本が好きで、よく買ってくれた。文が子供っぽくなくて、挿絵の質も高いものを選んでくれたように思う。中でも「小公子」「小公女」は、訳が川端康成、挿絵がいわさきちひろ、後書きが谷川俊太郎という豪華版で、子供心にも惹きつけられ、お気に入りだった。

娘が産まれてからも、母はよく本を送ってくれた。多くは娘宛てに、時々私宛てに。遠くに嫁いだため、会う機会も少なかったが、母は娘の成長に合わせた本を探すのが楽しそうだった。私宛ての本には、折々の母の気づきや想いが込められているように感じた。私からも時々、本を送った。末期がんの母を励ますような本もあった。言葉にすると気恥ずかしいような気持ちを、本に託した。最後に母から送ってきた本は、五木寛之の「大河の一滴」だった。母の覚悟を感じた。「私、死ぬのは怖くないんだけど…」と言っていた母。けど、なあに？何が怖い？母に聞けなかった。

今も時々本を開いては、母の想いを辿る。

私は、人生の最期にどんな本を選ぶのだろう。そんなことを考えながら。

本を通して家族と共有した時間は、温かく懐かしい。その本をひらくと何度も反芻される。